

飛鳥石神遺跡の調査

飛鳥・藤原宮跡発掘調査部

この調査は昨年度の石神遺跡第1次調査に引き続き、昭和11年の石田茂作氏らによる石神地域の調査を再確認するために、第1次調査区に接する北側の水田において実施した。主な検出遺構は、7世紀前半～中頃の遺構と7世紀後半の遺構との2期に分かれる。

7世紀前半から中頃の遺構には石組大溝S D335・435、石組小溝S D490、素掘り溝S D365・500、掘立柱建物S B450および、これらに伴う礫敷や石列などがある。また、掘立柱塀S A380・480もこの時期に属する可能性が高い。南北石組大溝S D335は北端で東に折れ、東西石組大溝S D435に繋がる。第1次調査分を併せて総長76cmを検出したことになる。大溝は地山を幅2m、深さ1m掘り下げて、その内壁に沿って20～70cm大の自然石を3～5段積み上げて側石としている。ただし底石はない。S D335の溝幅は上面で1m強、底面で80cm弱とするが、S D435では溝幅がS D335に比べて10～20cm程広い。溝底は、南側より北側が20cm低い。この溝には粗砂と細砂の互層からなる堆積層が厚さ50cmに達しており、これを覆う埋土からは7世紀前半を中心とする土器やメノウ製垂飾破片が出土した。素掘り溝S D365は石組大溝S D335の西側を、素掘り溝S D500は石組大溝S D435の北側をそれぞれ併走している。交叉部では自然石を置いてS D500を堰き止めており(S X501)、この時期の遺構の中にも細かい時期差があったことが窺える。石組大溝S D335の東側には掘立柱建物S B450がある。桁行5間(12m)・梁行3間(5.4m)の南北棟で、柱間はやや不均等ではあるが、桁行2.4m等間、梁行1.8m等間と理解できる。建物外の西南部に近接して、L字型に連なる石列S X432・433がある。一部を検出したにすぎないが、S B450に対して外側に石の面を揃えていることから、雨葛石を巡らした低い基壇を形成していたものと考えられる。基壇外には拳大の礫を敷いている(S X430)。礫敷の範囲は西側では石組大溝S D335の東岸までたどれる。調査区西北隅では蛇行する石組溝S D490の一部を確認した。側石・底石ともに20～30cm大の自然石を用いており、幅・深さはともに30cm前後の小溝である。溝の周囲は、底石と同じ高さまで中世の削平が及んでおり旧状を著しく損っている。溝の性格については、今回調査地の西に接する水田の発掘を計画しているので、その調査成果を待って検討することにした。掘立柱塀S A380は調査区東辺に位置する南北塀で、中央部を中世の土壌で壊されている。北4間分の柱間寸法は2.3m等間であるのに対して、南3間は北から2.6m・2.6m・2.3mと異なる。したがって南3間分については掘立柱建物の西妻である可能性も考えられる。

7世紀後半の遺構としては、掘立柱建物S B400とこれを囲む石敷S X359・370・401、石敷東端を区切る縁石S X358、石組溝S D402などがある。掘立柱建物S B400は桁行6間(2.6m等間)・梁行3間(2.5m等間)の南北棟で、柱筋から1.1mを隔てて、東・西・北側に幅2.4mの石敷S X359・370・401が巡っている。この石敷は7世紀前半～中頃の礫敷を覆っており、

径10～20cm とやや大振りの川原石を平坦に敷き詰めている。石敷の北は東西石列 S X 403 によって、東は南北石列 S X 358 によって画される。石列 S X 358 を縁石として、その東には石敷より約20cm 高い平坦地が造成されているが、この平坦地上には7世紀後半に属する遺構は認められない。石敷の東北隅からは縁石 S X 358 に沿って石組小溝 S D 402 が北へ延びており、石敷内の排水施設と思われる。

今回の調査により、7世紀前半から中頃にかけて当地域の基幹水路であった石組大溝を7世紀後半には埋め立て、この上に新たに建物を造営し、さらに東半部には一段高い平坦地を造成していることが明らかとなった。このように土地利用形態を大きく改める造営が行なわれたことは、この時期の飛鳥寺北方一帯の性格を考える上での手懸りとなろう。(清水真一)

